

話法不定法の歴史的考察

話法不定法、または歴史的な不定法と呼ばれるこの特異な性格を有する不定法は、前世紀末から今世紀初頭にかけて、ヨーロッパの *romantische* たちに非常な関心を持たれ、種々の角度から取り扱われて、幾多の論争を惹起している。その内容もさまざまで、フランス語における話法不定法の起源発生の問題から、その用法の歴史的展開、文体的価値、不定法に先立つ前置詞の問題、ラテン語や他のロマンズ語におけるそれとの比較研究等、実に多岐にわたっている。このように、話法不定法の諸問題に当時の学界の注目を集めさせる大きな誘因となったのは、Ph. マルクーの学位請求論文 *Der historische Infinitif im französischen* (1888) である。筆者は修士論文において、浅学をも顧りみず敢えて「話法不定法の諸問題」と取り組んだ際、特にマルクーに負う所多大であった。そして小稿においては、十五世紀から現代までの話法不定法の歴史的展開、特にその用法の変遷の時代的性格を考察してみたく思っている。唯小稿の導入部であるフランス語における話法不定法の起源、

福 本 直 之

発生の問題に関しては、マルクー説の紹介とそれに対する疑問点を提示するに留めておく。

マルクーがフランス語における話法不定法の自然発生説を唱えるまで、大方の見解はラテン語の歴史的な不定法の継承と見なし、ローマの文法家がそれを省略で説明した如く、フランスの文法家の多くもその説を踏襲していた。ところが、この所謂ラティニスム説は次の三つの事実からも認めがたいものである。

1 元来口語より発生したラテン語の歴史的な不定法はタキトウスの時代を最後に、既に二世紀のセネカ、ユスティヌスには見られず、教会ラテン語にはその痕跡すら留めていない。

2 フランス語における話法不定法の最古の用例は、少くとも十五世紀以前には見当らない。

3 話法不定法の用例が豊富に見出される最古の作品は「新百話」(*Cent nouvelles nouvelles*, 1456-61) である。

1、2の事実からは、話法不定法のフランス語へのラテン語から

の直接的継承は認める事が出来ない。若し話法不定法が人為的に学者や文筆家によって或る時期にラテン語からフランス語に移入されたものであるなら、つまり間接的継承があるとすれば、その移入された時期と最初の用例がどこにあるかが問題である。2、3の事実からこれを考えると、先づフランス語に表れた話法不定法の濫觴とも云うべき用例に関しては、十五世紀以前からもかなり報告されているが、いづれもそれが話法不定法であるという確証に乏しいものである。たとえば Brunot や フォスラーは「Roman des sept sages de Rome」(1215) に、マルコは「Beuve de Hantone」(13^e) に Marcou は「Supplément des Roman du Renart」(13^e) や フロワサル⁽⁴⁾ に、又「Le ménager de Paris」(14^e) にも各々用例を見出したとしているが、これ等の用例はわずかに散見されるにすぎず、中には写本によって相当の差違のあるものもあり、にわかには信ずるわけにはいかない。故に、確実な用例として認められる最古のものは、十五世紀に入ってからのもので、「新百話」は用例が豊富に見出される最初の作品である。この作品の性格からしても、又当時の民衆の口語を以てゴール精神に溢れた庶民文学を書き上げた「新百話」の作者は少くとも、十三世紀も以前のラテン語法を発掘してフランス語に取り入れた功労者であるとは考えられないし、「新百話」前後に話法不定法が人為的にラテン語からフランス語に導入されたという事実も認められない。後述する如く、ラテン語のフランス語に対する影響の非常に著しかったルネサンス時代、すなわち十六世紀における話法不定法の用例も、ラテン語から人為的導入に否定的解答を示している。以上の事から latinisme

の間接的継承もまた認められないのである。

ではマルクールの説く如く、フランス語の話法不定法は、かつてラテン語においてそうであったように、やはりフランス語より自然に発生したものであろうか。マルクールはその源を十二世紀の口語に用いられた命令不定法に求め、彼の自然発生説を体系づけている。

マルクールの自然発生説は、他の諸説に比べると、一応の説得力をもっているが、あくまで仮説の域を出ないものである。フランス語における話法不定法の発生に関しては、現在未だ承認すべき定説は存在しない。しかし従来一般に行なわれていたラティニスム説の誤りである事を明らかにしただけでもマルクールの名は特記するに価する。最後にマルクールの自然発生説への疑問点として私見を挟むと、その発生経路に関して、マルクールはラテン語以外の外国語のフランス語への影響を考慮に入れていない事が挙げられる。話法不定法が「新百話」より相当以前から口語としてフランス語に存在していた事は一応認めるとしても、どこから口語に入ってきたかという問題に関してはマルクールの云う十二世紀以来の命令不定法にその源を求める以外に、他の可能性も存在する。たとえば、プロヴァンス語を仲介としたイタリア語の影響も、当時の両国の歴史的状況の下では充分考慮の余地がある。まして話法不定法の用例の豊富に見出される最初の作品が、ボッジョの「百物語」やボッカチオの「デカメローネ」に倣ったものである以上、その作者はフランス語以上にその使用の頻繁なイタリア語の話法不定法を当然意識していたと考えられるからである。

今までくりかえし述べて来たように、十五世紀中葉の「新百話」

は語法不定法の豊富な用例が見出される最古の作品である。この作品の用例からは、以下の事が観察される。

1 語法不定法の主語は常に人物を表す名詞である。marî, che-valier, curé 等、

2 主語には多くの場合、冗語が附加されている。bon, 所有形容詞 mon, notre 等、

3 不定法に先立つ前置詞 de が、純粹不定法の三つの場合⁽⁶⁾。

今これをもう少し詳しく観察してみると、主語が人物を示す名詞、或いは代名詞である事は、語法不定法の役割からして当然であるが、それに多くの場合冗語の bon や所有形容詞が附加されている事から、初期の語法不定法の極めてくだけた民衆語的性格を認める事が出来る。すでにジュピツァー⁽⁷⁾が注目しているように、これ等の bon や本来の意味を失った所有形容詞が冗語として附加されている主語は、読者にある種の親近感を与える作用をする。同時に作者はこれ等の冗語を附加する事により、読者により感情的、より強意的、より密接な効果を挙げる事が出来る。語法不定法の主語にこの種の冗語を附加する用法は、以後伝統的に受継がれていく。この伝統は、語法不定法の用法の本流をなすもので民衆の口語を作品に使用する事の多い *contours* の用法に特徴的なものである。

次の前置詞の問題からは、「新百話」の用例がフランス語における語法不定法の形態の固定期以前のものである事が推量出来る。ラテン語では常に純粹不定法が用いられ、他のローマンス語、イタリア語やスペイン語においては前置詞が用いられているのに対し、フランス語の語法不定法は普通 *de* を先立てている。所が「新百話」

の用例では、前記の三つの場合が見られる。この現象は単に「新百話」においてだけではなく、十七世紀までには一般に見られる事である。レルビ⁽⁸⁾が説いている如く、一般に古代フランス語では *ce* が不定法に先立つ前置詞として *de* よりも優位を保ち、英語の *to*、ドイツ語の *zu* の様に、フランス語においても不定法に先つ前置詞は *ce* に一般化されるに至るが如き形勢を示していた。しかし前置詞の *de* の勢力回復に伴い、以後フランス語では不定法に先立つ前置詞が各人の好みや選択に任されていた時期がかなり長い間続いたのである。語法不定法に関しても、十六世紀に文法家ラムスが語法不定法に先立つ前置詞を *de* と記載するまで、前述の三つの場合が（「新百話」の時代にはすでに *ce* が絶対的優位を占めているものの）並行して用いられていたと考えられる。一つの作品の中から、前置詞の使用に関して前述の三つの場合が見出されるのは、語法不定法の形態が固定される以前の用例に共通した特徴である。

「新百話」以外の十五世紀の用例としては、アントワヌ・ド・ラ・サルとコミーヌより各二例が報告されている。

十六世紀に入ると、語法不定法の使用はますます頻繁になり、その用例の見出される作品分野も拡大される。しかし用法の性格は、カストナー⁽⁹⁾が「十六世紀の語法不定法」と題する論文で論証しているように、十六世紀においても前世紀同様、日常口語に相当広く用いられていた民衆語的性格が文学語としてのそれよりもはるかに強いのである。ブリック⁽¹⁰⁾が十五世紀以来語法不定法は *style marotique* に特有のものであると述べているのも、この不定法の軽妙洒脱

な民衆語的性格を云ったものだと思う。従つて十六世紀においても、*contours* に用例が数多く見られるのは当然である。マルグリット・ド・ナヴァールからの用例は報告されていないが、デ・ペリエ、ノエル・デュ・ファイユ等には豊富な用例が見出される。そしてその用法は完全に「新百話」のその継承、踏襲である。一つの用例の借用、模倣もこの時代には見られるが、この云わば「本歌どり」の如き用法は、*contours* の用例にはまゝ見受けられる現象である。例えばデ・ペリエが用いたと全く同じ用例をアンリ・エティエンヌが借用しているし、非常によく似た用例がファイユにも見られる。元の用例が初期の話法不定法の民衆語的性格を帯びた代表的用法に属しているため、後者の作爲的な借用、模倣が行なわれるのである。

次にロンサールやデュ・ペレーのような *Piècede* の詩人達における用例の欠如に注目したい。この事実に関して、レルヒやカストナーは、十六世紀の話法不定法の余りにも卑俗な、民衆語的性格のために、高尚な文体を欲する詩人、特にフランス語の発揚に心掛けた人々から敬遠されたものであらうと説明している。マルクーも、進んでラテン語法を取り入れ、それによつてフランス語を豊かにする事に努力した人々における用例の欠如を重視して、この事実を話法不定法がラテン語から人為的に移入されたものではないとする彼の説を裏づける論拠に用いている。

ラブレールも話法不定法を好んで用いている。彼は話法不定法の主語にはじめて事物名詞を採用し、その擬人化に成功している。ラブレール以前にも、アントワヌ・ド・ラ・サルが主語に事物名詞を用

いているが、不定法に用いられている動詞との類義的關係から厳密な意味での擬人化とは云えない。シュビツァーも、この新しい用法を十九世紀にゴンクール兄弟が話法不定法の主語に抽象名詞を用いるに至る過程での一つの誘導体として注目している。ラブレールには、前置詞を先立てた用例は見られないが、純粋不定法の用例は幾つかある。

話法不定法の使用される分野の拡大も、十六世紀の話法不定法を考察する上で重要な事実である。全般的に見ても話法不定法が詩に用いられる事は極めて珍らしいが、その最も古い用例がルメル・ド・ベルジュ、ムラン・ド・サンジュレーから報告されている。戯曲の分野からもジョデルの喜劇「*Edgène*」と、題名不詳のファルスから各一例が挙げられる。

文法家ベトルス・ラムスは、話法不定法をはじめて文法書に記載している。

上述した如く、十六世紀における大半の用例が文学語としての性格より、十五世紀以来の民衆語的性格を強く留めているとは云え、一方ではラブレールによる主語の擬人化、詩、戯曲への使用分野の拡大、文法家による記述等により話法不定法が、この世紀にすでに民衆語的性格の強い所謂 *contours* の用法から、徐々に文学語の世界へも採り上げられていく発展段階にあった事が推察出来るのである。

ヴェルヴィル、スカロン、ロレ、ソレル等の十七世紀前半の作家に見られる用例はかなりあるが、その用法は「新百話」以来の *contours* のそれに留まっている。ブリュノが、十七世紀においても

なお話法不定法は、民衆的、通俗的な云いまわしと見なされていた、と述べているが、十七世紀前半には特にその傾向が強い。しかし、後半の古典主義時代に入ると、ラ・フォンテーヌを除く、所謂一六六〇年代の作家の使用は非常に稀になり、その用法も文学語としての性格を強く示している。ボワロー、マレルブ、ラシーヌ、ラ・ブリュエール等からは用例は見出されないが、コルネイユとモリエールに若干例が挙げられる。中でもコルネイユの初期の喜劇「*Illusion comique*」とモリエールの「うるさ方」に見出される用例は、共に不定法におかれた動詞が *dire* で、*que* にはじまる従節を伴っている。話法不定法が従節を伴うこの新しい形の用例は、他にも同時代のジャン・シャプランとラ・フォンテーヌ(動詞 *croire*) からも挙げられるが、この時代以前には見当らないようである。元来話法不定法の示す行為は、その行為に先立つ他の行為との因果関係において当然予想し得る帰結を表しているのであるから、*dire, répondre, crier* 等のような動詞が話法不定法に用いられると、多くの場合それ等の動詞の具体的内容が次に引用符を用いて示されている。それは話法不定法を口語的性格をも多分にもち合せている民衆語として用いている *contenus* の用法においては極めて自然な現象である。一方、普通には引用符で示される不定法の内容を、接続詞 *que* を先立ててとして従節に納めようとするような、文法的操作は、文学語として未成熟な十七世紀の話法不定法には無理であったらしく、この用法は二十世紀に入って学者語として用いられるまで、以後足跡を残していない。

ラ・フォンテーヌは、同時代の他の古典主義作家に閑却されてい

た「新百話」やラブレールの精神を継承して、豊かな古語を縦横に駆使して彼の文体を一段と生彩にあふれたものに仕上げていく。彼の蛙やほら吹きが常に話法不定法の代表的用例として文法書に引用される程、ラ・フォンテーヌの用例は有名である。アルカイズムを好んだラ・フォンテーヌは彼の時代には文学語としての表現価値をほとんど認められていなかった話法不定法を採択し、それまでの用法の幾つかは継承しつつも、更に彼自身が磨き上げた文学語としての新しい用法をも附け加えている。新しい用法の中でも、特に目につくのは、不定法に用いられている動詞の種類が非常に増えている事である。レルビは話法不定法に用いられる動詞の種類を大きく、「音のするもの」「動きのあるもの」の二種に分けているが、ラ・フォンテーヌは動詞の種類をそれ等以外にも、受動態、助動詞、本動詞として用いた *avoir, être* にまで広げている。又話法不定法の主語にも文体的効果を一層高めるために、造語、卑称形などが当てられている。明らかにラブレールの模倣と思われる用例や、ラブレールの造語である動詞 *trinquet* を頻繁に用いているのもアルカイックな効果を狙うての事と考えられる。

十七世紀の文法家から話法不定法に関する記述の見られるのは、シャルル・モーブだけである。彼は *Grammaire et syntaxe Française* (1626) に、「話法不定法は突然、急速に行なわれる行為を示すのに用いられる。」と記している。この文法書の著作年代からも分るように、この定義は十七世紀前半までの主流的用法であった、所謂 *contenus* の用例から引き出されたもので、文学語として用いられた場合には当てはまらない。有名なヴォージュラは

「Remarques sur la langue françoise」(1647)では、一言も話法不定法にふれていない。又クイトウス・クルティウス(1659)の翻訳では、ラテン語の歴史的不定法をフランス語では歴史的現在に訳している。セヴィニエ夫人の師であるメナージューも「Observation sur la langue françoise」では、「歴史的話法」なる一項を設けているにも拘らず、話法不定法に関する記述は見られない。十七世紀の文法家に話法不定法が閑却されている事実からは、この云い間違いが当時すでに、文語としては教養ある人士の用いないもので、多分にアルカイックな性格を有していた事がわかる。一方口語としては、わずかに民衆語としての余命を保っていた古めかしい話法で、それを耳にする場合には、その古めかしさがある種の滑稽味を伴うのである。モリエールがドン・ジュアンで愚鈍な百姓の口語として用いているのもこの消息を物語っている。

サン・シモン、セヴィニエ夫人の用法も印象的である。両者共に、特にサン・シモンは好んで不定法に先立つ前置詞に³⁵を用いている。前述したように、不定法が³⁶を先立てている用例は十七世紀以前にもまま見られるが、サン・シモンにおけるが如き頻繁な使用は特異で、彼以後話法不定法に先立つ前置詞として³⁷が用いられた事実はない。前置詞³⁸の使用に関して、シユビッツァーは、³⁹を先立てている不定法が行為そのものを示すのに対し、⁴⁰の場合は行為が到達すべき目標を示している⁴¹と見なし、⁴²を先立てる不定法の主語は、行為の動作主ではなく、その行為を導き出す仲介者の役割をもっている⁴³と説明している。

サン・シモンの「回想録」、セヴィニエ夫人の「書簡集」への話

法不定法の使用分野の拡大から、新しい用法が展開されていく。それは話法不定法の主語に実在人物の固有⁴⁴名詞、しかも作者と極めて密接な関係にある人物を登場させる用法である。この用法は以後、ナポレオンを経てゴンクール兄弟へ、更に学者語の分野へと発展していく。「書簡集」における使用は、十八世紀にはローラン夫人に、十九世紀にはジョルジュ・サンドに求められる。

十八世紀は、話法不定法の歴史を通じてその用例の最も乏しい時代である。ルソー、ディドロを除けば、わずかにローラン夫人、アンドレ・シエニエ、マリヴォーに若干の用例が見出されるのみである。

ブリュノは、話法不定法が革命前夜には style plaisant に用いられていると云うフェローの説を紹介しているが、この種の用法は何も十八世紀に限らず、元来卑俗な民衆語である話法不定法が「笑話」⁴⁵を得意とする contents に用いられている場合には、多少共 plaisant な性格を内蔵しているものである。

十九世紀に入ると、話法不定法の用例は広く全般に行きわたっている。世紀前半のロマン主義作家からも、後半の写実主義、自然主義作家からも等しく、ほとんど全ての代表的作家における使用が確認されている。

世紀前半の用例は、「書簡集」に用いている、サンドを除いて、全て小説に見出される。詩の分野での使用が少いのは、話法不定法の歴史全般を通じて云える事であるが、特にロマン派の詩における

用例の皆無は、話法不定法の性格よりしてむしろ当然の事である。すでにマルク⁽³⁸⁾も指摘している如く、話法不定法のもつ古風でどこちなく、時には滑稽味をも伴う性格が、描写に一段の生氣を与えるための手段として小説には適するものであつても、この奇異な云いまわしを詩に使用する事は、読者の幻想を刺戟するどころかむしろ、その逆効果を招く危険が多分に存在するのである。

小説での使用は、ユゴー、ミユッセ、スタンダール、メリメ、ゴッティエ、バルザック等、前半の代表的作家の全てに認められるが、とりわけバルザックの「風流滑稽譚」における用例は豊富である。バルザックは勿論、「新百話」を意識してこの作品で話法不定法を用いたのであるが、その頻度はむしろ濫用に近い程である。バルザックの用いた擬古文の欠点については、すでに色々と指摘されているが、話法不定法の用法に関しては、前置詞⁽³⁹⁾を常に不定法に先立てている事はともかく、文頭に附加されるべき接続詞⁽⁴⁰⁾、⁽⁴¹⁾等の欠如が目立っている。それでも⁽³⁹⁾レルヒは、ラ・フォンテーヌについて、バルザックを文語としての話法不定法の再興に尽した作家の一人に加えている。

十九世紀後半に入ると、話法不定法の使用分野も広がり、その用法も注目すべきものがある。写真主義作家では、シャンフルーリ、フロベール、「日記」に用いているゴンクール兄弟、「紀行文」のテヌ、次いで自然主義作家からはゾラ、モーパッサン、ドーズ更に象徴派のヴェルレーヌは「懺悔詩集」に使用している。そして戯曲からはラビッシュが挙げられる。

小説では余り話法不定法を使用しなかったと云われるゴンクール

兄弟の「日記」での用法には注目すべきものがある。前述したように、「日記」における使用は、「回想録」の用法を継承したものであるが、ゴンクール兄弟は更に新しい用法を生み出している。第一に挙げられるのは、話法不定法の主語に実在人物の固有名詞が用いられている場合、第二に主語に抽象名詞が用いられている事、第三は不定法の時制の問題である。

先づ第一の場合は、すでにサン・シモンに見られる事であるが、サン・シモンの場合は固有名詞で示される行為者は単にサン・シモンにより客観的に観察され、その行為は単に記録、報告されているだけで、普通その行為者や行為に対するサン・シモンの感情は表示されていないが、「日記」においては、話法不定法の主語となっている作者と極めて密接な関係を有する人物に対する、或いはその行為に対するゴンクール兄弟の特別な感情、具体的には多くの場合、皮肉、揶揄等の感情が多分に働いているのが窺われる。この傾向は、後述する学者語としての用法では更に鮮度を増している。

第二の問題である抽象名詞が主語に用いられるに至った事は、シユピツァーの表現を借りると、話法不定法の印象的昇華と見なされねばならない。ラブレ⁽⁴²⁾における主語を擬人化した用法の創始、ラ・フォンテーヌ⁽⁴³⁾によるその推進は、ついに最早民衆語的性格を全く留めない、極めて高度に洗練された話法不定法の芸術的用法を導き出すに至ったのである。

第三に、話法不定法の時制に関する問題であるが、ゴンクール兄弟には不定法の時制が明らかに「反覆の半過去」⁽⁴⁴⁾に相当すると判断出来る用例がある。話法不定法に限らず、一般に不定法そのものは

時制の概念を持っておらず、不定法の時制はコンテキストによっていづれかに準拠するものである。語法不定法の場合は、一名この不定法が歴史的な不定法と呼ばれる事からも推察出来るが、具体的には、歴史的現在、歴史的過去（普通単純過去）、絵画的或いは描写の半過去のいづれかに相当するのが普通である。単純過去と等しい意義に用いられている複合過去の用例は若干存在するが、「反覆の半過去」のような甚だ歴史的でない時制の概念を語法不定法が負っている例は非常に珍しい。

以上の観察からもわかるように、ゴンクール兄弟の用法は「芸術的文章」の創始者にふさわしく、極めて技巧的である。ゴンクール兄弟の用法においては、語法不定法本来の民衆語的性格は全く認められず、その用法が純粹に文学語としての位置を占めている。

一方十九世紀における語法不定法の用法の一般的傾向としてアルカイズムが見られる。特に前述の「本歌どり」的用法と、再び口語に用いられている事は注目に価する。前者の用法には、バルザックのみならず、テヌ⁽⁴⁶⁾の用例に見られる如く、ラ・フォンテーヌの用例を模したのもや、用例の模倣ではなくとも、その内容から容易にラブレールやラ・フォンテーヌを想起させる種類のものがある。後者の口語での使用に関しては、その用法が十七世紀でのそれとは、多少異なっているようである。十七世紀の、例えばモリエールの用例に見られる用法は、云わば現在会話に単純過去や接続法半過去を用いた場合に生じると同じ内容の滑稽味を狙ったもので、当時の教養ある人士によって、このような云いまわしを口にする事は当然忌避されるべきものであった。だからこそ、モリエールは「J'avons dit」

程無知無学な百姓の口に語法不定法を置いているのである。十九世紀においてもモレバサンやドーデ⁽⁴⁹⁾の用例はこの用法に属している。しかしラビッシュ⁽⁵⁰⁾やベルンシュタイン⁽⁵¹⁾の用例（共に戯曲であるが）からは、民衆語的性格は窺われず、むしろ当時ではすでに文学語に属しているこの云いまわしを口語に意識的に用いた、云わば多少上品ぶった気取った表現としての性格が認められる。

ブルジョアに始まる二十世紀の語法不定法の文学作品における使用は、フランス、ロティ、バレス、デュアメル、レオン・ドーデ、コレット、モンテルラン、シャンソン、シュノン、プレヴェールに及んでいる。そしてその用法は、ほぼ十九世紀に等しく、大別すると次の四つに分けられる。

1 文体に生気を与えるため、単に変化動詞の代りに用いられているもの。⁽⁵²⁾（用例の大半がこれに属す）

2 アルカイックな用法としてデ・ペリエ、ラブレール、ラ・フォンテーヌに関連をもつもの。⁽⁵³⁾

3 所謂 *conteurs* の用法に属する、くだけた *plaisant* な性格をもつもの。⁽⁵⁴⁾

4 以上の三用法以外のもの。抽象名詞を主語にしている場合、口語での使用、従文で用いられている場合。

ブリュノ⁽⁵⁵⁾が「現代における語法不定法の使用は誤りでないばかりか上品でもある。」と述べているのは、1においてである。

二十世紀の語法不定法の用法は、文学作品以外の他の分野へも発展を示している。その一つは「新聞記者用語」で、他は「学者用語」における用法である。

「新聞記者用語」として用いられる語法不定法については、ブリュノ、プリュノー⁽⁵⁶⁾のすでに指摘しているところで、その形態の有する惹句的性格や、不定法自身のもつ超時法的性格からも、語法不定法の使用分野が「新聞記者用語」に広がった事は容易に了承出来る。筆者は寡聞にしてこの分野における用例をあまり持ち合せていないので、その用法を論ずるわけにはいかない。諸賢の御教示を待つ。

次に「学者語」としての語法不定法の用法を紹介しておきたい。「学者語」と筆者の呼んでいる語法不定法の用例は、具体的には、ドーザ、ジョランのような文法家の著作、シャンピオン、テュアーヌの様な学究、ドゥーミット、ジローのような批評家、評論家に論文や専門研究書に用いられたものを指すのである。この分野での語法不定法の使用は恐らく十九世紀末には相当広く行なわれていたのではないかと思われる。そして、その用法は非常にゴングクル兄弟に近いものである。「学者語」としての代表的用法は、不定法の主語に論争相手や、所説を引用した人物名が用いられている場合であるが、この場合ゴングクル兄弟におけると同様、不定法で示される行為、或いはその主語である行為者に対する作者の揶揄、皮肉などの感情が読みとられるし、更に語法不定法で示されている事実に対する反論が次につづく場合や、接続詞以下の従文で示されることもある。つまり、論旨を進めていくための手段としての役割をもっているのである。勿論上記のような感情的性格を持たずに、単に一つの事実の報告、(例えば注書において)をするための一種の卜書でしかない用例も多い。不定法に用いられた動詞に *conclure*, *noter* 等が見受けられるのもこの分野では極めて当然である。

「学者語」に用いられた語法不定法は、文語だけでなく、口語においても使用されたものと考えられる。例えば *Et tel de conclure que* は、*Tel en conclut que* の代りに講義や講演で使用された可能性が大きい。マルクー⁽⁵⁸⁾は、前に挙げたドーデの用例では、永年美術大学の守衛をしていた男の口語に語法不定法が用いられているのに注目し、大学の中で口語として用いられていた語法不定法の存在を指摘している。

冒頭にも述べた如く、語法不定法の研究がヨーロッパのロマンスト達に活発に行なわれるようになった時期と並行して、「学者語」における用例が見出されるのも非常に興味のある現象である。

フランス語の語法不定法は、その源がどこに求められるかはともかく、文学作品に使用され出した十五世紀には、極めて民衆的、そして同時に口語的性格をも併せもった云いまわしであった。そしてその初期の用法は「新百話」以来伝統的に *conteurs* の受継いでいるもので、語法不定法の代表的、主流的用法は二十世紀の今日まで、やはりこの *conteurs* に属するものである。一方文学語としての用法は、ラブレールの用法を経て、ラ・フォンテーヌで一応完成されたものと考えられる。しかし十七世紀には一般に民衆語としての性格がはるかに強く、純粹に文学語としての位置につくのは十九世紀に入ってからである。現代でもなお歌われている *“Et nous de m'encourir”*⁽⁵⁹⁾ という *chanson populaire* は十七世紀のものと云われるが、この時代の民衆語的性格をよく留めている。

一方文学語としての語法不定法の流れは、今日の文法家が元来本

流である conteurs に用ゐられた民衆語としての性格を見落す程に成長し、特に十九世紀における著しい発展は、語法不定法に極めて高い地位を与えてゐる。二十世紀に至つては、文流であるが文學語としての用法が、主流の conteurs の用法を圧し、卑俗で古めかしい、時代にふつてはその使用が滑稽ですらあつたこのlangage といふ、élégant であるものを見なれてゐる。そして遂には著者語としての地位をも獲得したのである。

NOTES

※紙面の都合上用例の掲載は最小限に留めた。

- 1) Roman des sept Sages de Rome ; Le Roux de Lincy, 1838 p. 23 Et li sengliers se couche, et cil de grater (Ph. Marcou: Der historische Infinitiv im französischen, p. 11)
- 2) Beuve de Hantone ; Cil pasent outre, et il dou cheminer (Tout un sentier se prent a garder) (E. Lerch : Historische französische Syntax t. II P. 160)
- 3) Supplément des Roman du Renart; Chabaille, 1835n Et li levrier après d'aler (Marcou: ibid. p. 11)
- 4) Froissart; Chroniques, t. I §131 Li cris et la noise se commença tantost à eslever, et gens entrer en très grant effroy, car il estoient soudainement souspris. (Marcou : ibid p. 12)
- 5) Le Ménagier de Paris ; Société Bibliophiles français

1846 Ceste venue fust tantost publiée, et fut la renommée de courir pais qu'il venait belle vierge extraicte de grant lignage qui devoit estre espouse du Marquis de Saluces. (Marcou: ibid. p. 13)

- 6) Cent nouvelles nouvelles ; Le Roux de Lincy, 1841 Et bon chevaier de l'abandonner, et à Monseigneur s'en retourne. L. I, N. p. 99 Si tost qu'il fut logié le bon chevalier tire son las bien fort, et dist bien hault : Hal ribault prestre, estes-vous tel ? Et bon prestre à soy retirer. L. II, N. 76, p. 180 Et bon homme de s'avancier, et lever sus, et chanter Te Deum laudamus, et venir à son asne, qu'il cuidoit avoir retrouvé, L. II, N. 79, p. 194

- 7) Leo Spitzer; Zum französischen historischen Infinitiv p. 542 (Zeitschrift für romanische Philologie, L, 1930)
- 8) Eugen Lerch ; Hauptprobleme der französische Sprache, p. 311
- 9) Petrus Ramus ; Grammaire Française. Le verbe délibératif gouverne l'infy : ... et mains de courir et nous daller après. (Marcou, ibid. p. 6)
- 10) L. Kastner; L'infinitif historique au XVIIe siècle, p. 163 (Revue de philologie et de littérature XVII, 1903)
- 11) Brunot-Bruneau ; Précis de grammaire historique de la langue française, p. 541

12) Des Périers: Nouvelles créations et joyeux devis,

1086

XCVI Alors le cordouannier de courir après et de crier : "Arrestez le larron! arrestez le larron!" Henri Estienne; Apologie pour Herodote, p. 228 Noël du Fail; Contes et discours d'Eutrapel, p. 77 A ceste voix, le paillard hausse d'un ton ses injures, criant : au voleur! au larron! Et moi de fuir.

13) Eugen Lerch; Der historische Infinitiv, p. 169 (Historische französische Syntax, t. 11)

14) L. Kastner; *ibid.* p. 167

15) Ph. Marcou; *ibid.* p. 16

16) Antoine de La Sale; L'Histoire du Petit Jehan de Saineteté et la Dame Belles-Cousines, p. 113 Alors trompettes de sonner, et voix du peuple de crier.

17) L. Spitzer; *ibid.* p. 544

18) F. Brunot; La pensée et la langue, p. 478

19) Cornelle; Illusion comique, Marty-Laveaux Quand il n'a plus douté de mon affection, J'ai fondé mes refus sa condition; Et lui, pour m'obliger, juroit de s'y déplaier! Mais que malaisément il s'en pouvait déplaier; Que les clefs des prisons qu'il gardoit aujourd'hui Etioient le plus grand bien de son frère et de lui. Moi de dire soudain que sa bonne fortune Ne lui pouvoit offrir d'heure plus opportune; A. IV, s. 2 1079-

20) Molière; Les Facheux, Marty-Laveaux Moi, de lui rendre grâce, et, pour mieux m'endépendre, De dire que j'avois certain repas à rendre. A. I, s. 1

21) Jean Chapelain; La vie de Guzman d'Alfarache, Luy de dire que si, les autres que non. III, 481

22) La Fontaine; Fables, L'Éléphant et le Singe de Jupiter Aussitôt l'éléphant de croire Qu'en qualité d'ambassadeur Il venait trouver Sa Grandeur.

23) La Fontaine; Le Lièvre et les Grenouilles, Il (le lièvre) alla passer sur le bord d'un étang. Grenouilles aussitôt de sauter dans les ondes; Grenouilles de rentrer en leurs grottes profondes,

24) *ibid.* Le Lion et le Chasseur; Le fanfaron aussitôt d'esquiver; "O Jupiter, moture-moi quelque asile, Sécria-t-il, qui me puisse sauver!"

25) E. Lerch; Der historische Infinitiv, p. 168 §178

26) La Fontaine; Contes: La fiancée du roi de Garbe, La princesse à ces mots ne se put plus contraindre. Pleurs de couler, soupirs d'être poussés, Regards d'être au ciel adressés, Et puis sanglots, et puis soupirs encore:

27) *ibid.*; Le petit chien qui secoue de l'argent et des pierres Nous opérons mille merveilles; Malheur-

- reuses, pourtant, de ne pouvoir mourir ;
- 28) *ibid.* ; L'Ingratitude et l'Injustice des Hommes envers la Fortune, Le luxe et la folie enflèrent son trésor ; Bref, il plut dans son escarcelle. On ne parlait chez lui que par double ducats ; Et mon homme d'avoir chiens, chevaux et carrosses : Ses jours de jeûne étaient des noces. *ibid.* ; La Chatte métamorphosée en femme, Aussitôt la femme est sur pieds. Elle manqua son aventure. Souris de revenir, femme d'être en posture ;
- 29) *ibid.* ; L'Aigle et la Pie, Entretenez-moi donc, et sans cérémonie. Caquet-bon-bec alors de jaser au plus dru, Sur ceci, sur cela, sur tout.
- 30) *ibid.* ; Les Grenouilles qui demandent un roi, Le monarque des dieux leur envoie une grue, Qui les croque, qui les tue, Qui les gobe à son plaisir ; Et grenouilles de se plaindre, Et Jupin de leur dire :
- 31) Contes : La servante justifiée, Même dénat, même jeu se commence. Fleurs de voler : tétos d'entrer en danse. *ibid.* ; L'abesse, Panurge dit : Notre ami, coûte et vaille, vendez-m'en pour or ou pour argent. Un fut vendu. Panurge incontinent Le jette en mer ; et les autres de suivre.
- 32) *ibid.* ; Les frères de Catalogues, Puis de trinquet à la commère. Je laisse à penser quelle chère Faisait alors frère Frappart.
- ibid.* ; Les Rêmois, Je bois, dit-il, à la santé des dames. Et de trinquet ; passe encore pour cela.
- ibid.* ; Les troqueurs, A toi, compère. Et de prendre la tasse, Et de trinquet ;
- 33) Charles Maupas ; Grammaire et syntaxe française, p. 325 Nous usons aussi de l'infinif non dependant d'un autre verbe, pour signifier une sudaineté et hasiveté d'action. Nous chargeons brusquement l'ennemi, et luy de reculer et nous de le poursuivre. On s'en sert assez en la langue latine. Nous mettons ordinairement la conjunction Et devant puis la proposition (sic) De avec un nominatif interposé, ainsi. Il estoit yvre et se laissa tomber, et chacun de rire. (Marcou, *ibid.* p. 17)
- 34) Moliere ; Don Juan, Marty-Laveaux Enfin donc, je n'avons pas plutôt engagé, que j'avons vu les deux hommes tout a plain, qui nous faisant signe de les aller querir ; et moi de tirer auparavant les enjeux. A. II, s. 1
- 35) L. Spitzer ; *ibid.* p. 545
- 36) Saint-Simon ; Mémoires : Mignot, Le duc de Lauzun, Les voilà donc ensemble, et Lauzun à conter sa

fortune et ses malheurs à Fouquet.

- 37) F. Brunot ; Histoire de la langue française, T. II, p. 460
38) Ph. Marcou ; *ibid.* p. 20
39) E. Lerch ; *ibid.* p. 170 §181
40) Goncourt ; Journal, Académie Goncourt Entre ceux qui restent, l'on se met à causer théâtre, et Flaubert de blaguer un peu grossièrement, ainsi pu'il en a l'habitude: (jeudi, 12 janvier 1860) Et Saint-Victor de rire comme un éléphant qui recevrait une noix d'un singe. (25 mars 1863)
41) *ibid.* Et les lassitudes mornes, et les désespoirs infinis, et les hontes de soi-même de se sentir impuissant dans son ambition de création. (13 juillet 1862)
...aussitôt les immobilités et les endormements ennuyés de se réveiller dans un étirement de bêtes, de se secouer, de quitter leurs chaises... (Leo Spitzer)
42) L. Spitzer; *ibid.* p. 544
43) Rabelais ; Gargantua, Marty-Laveaux Lors flaccons d'aller, jambons de trotter, goubeleitz de voler, breusses de tinter. ch. v, p. 21
44) v. 26)
45) Goncourt ; *ibid.* Et chaque fois que je chantais cet air-là, elle de me demander ci et ça.
46) H. Taine; Voyages aux pyrénées, L'ours arrive au galop.

L'homme de lâcher son fusil et de glisser dans une fondrière.

- 47) H. Taine ; *ibid.* Au bas d'une montagne, la machine mit sa roue dans une fosse et pencha ; chacun de sauter à la façon des moutons de Panurge. P. Loti ; Mon frère Yves, Eux, alors, de lâcher son fardeau... et puis, de s'enfuir à toutes jambes.
48) Maupassant ; Le Trou, p. 336-7 Et la mienne, qui rageait, de répondre :
49) Daudet; Nabab, Charpentier p.59 Aussitôt chacun de se fouiller : "Vingt francs de port!" Mais je les ai pas."
50) Labiche ; Voyage de M. Perrichon, Armand: A Lyon, nous descendons au même hôtel... Daniel: Et le papa, en nous retrouvant, s'écrie : Ah! quel heureux hasard!... Armand: A Genève, même rencontre... imprévue... Daniel : A Chamouny, même situation; et le Perrichon de s'écrier toujours : Ah! quel heureux hasard! A. II, S. 1
51) H. Bernstein ; La Galerie des glaces, Et de fermer ses yeux charmants! Cette petite Madeleine!
52) M. Barrès ; Colette Baudoche, p. 58 Il voulait faire entendre qu'il était un maître, un ami des enfants, mais le petit Lorrain de répondre : - Toi, tu es le

Prussien de chez Mme. Baudoche. J. Duhamel : Deux hommes, p.197 Le lendemain, pas de Salavin, et cette fois Edouard de s'inquieter.

- 53) M.Bedel: Geographie de mille hectares, p.45 (les pie) tapissent le tout de brindelle ; et l'une de pondre pendant que l'autre vole à l'arapine. ibid. p.29 Adieu. torchons ! Ringages sont faits ! Et battoirs de battre, et laveses d'en conter ! H. Béraud ; Au capucin gourmand, p. 111 Un piqueur se chargea de répondre en sortant du prône les paroles de son maître ; et vilains d'aplaudir.

- 54) J. Duhamel ; Civilis, Un médecin consultait ses fiches et disait : "Tu as une plaie au bras droit ? Et l'homme de répondre avec modeste : "Oh ! ce n'est pas une plaie, c'est simplement un trou.

- 55) F. Brunot ; La pensée et la langue, p. 478

- 56) Brunot-Bruneau ; ibid. p. 541

- 57) T. Joran ; Les manquements à la langue française, p. 69 Et M. Brunot de conclure triomphalement que l'imparfait du subjonctif a fait son temps, qu'il est mort, bien mort, du subjonctif a fait son temps, qu'il est mort, bien mort, et que sans doute il n'y a plus qu'à rayer de la grammairiel ibid. p. 69-70 Et parce que ces petites sottises ignoraient cette règle si connue,

si facile, un brave professeur de Sorbonne de s'en autoriser pour s'écrier : La nation a parlé...

- 58) L. Thuasne ; François Villon, T, II. Picard Villon fait rimer "dyademe", "ame", "lame" "femme" ; et Marot de noter : "dyademe qu'il faut prononcer dyadame à l'antique ou à la parisienne." Mais Marot écrivait plus de soixante-dix ans après Villon ; et il n'est pas prouvé que la prononciation, dans ce laps de temps, n'ait pas subi de modifications, et que Villon n'ait pas prononcé "eme", comme on fit plus tard au XVII^e. siècle. P. 143

- 59) V. Giraud ; Le Christianisme de Chateaubriand, t. II p. 51-2 Et Chateaubriand de conclure dans une note de son exemplaire confidentiel: (Nakahira) L. Thuasne; ibid. p. 377 Et Jean Molinet d'ainsi conclure :

- 60) Marcou; ibid. p. 27 v. 49

- 61) Vieille chanson populaire; "Et moi de m'encourir" En passant près d'un petit bois Où le coucou chantait (bis) Dans son joli chant disait : Coucou, coucou, coucou, coucou, Moi je croyais qu'il disait : Tords lui le cou, tords lui le cou. Et moi de m'encourir (refrain)